

文章を書くことが苦手だという人は少なくないだろう。その理由の一つに、書けないからということがあるのではないか。なぜ書けないのか。まずは、書く内容が浮かばないということであろう。何を書いたらいいのか分からないのである。次に、書く方法をもっていないということがある。どう書いていいのか、分からないのである。

何をどう書くのか。このうち、優先的に解決すべきは、どちらだろう。多くの人は、内容、すなわち何を書くのかを優先させるのではないか。日記が書けない子どもに対して、今日はどんなことがあった？あのとときのあの場面でのことを書けばいいのではないの？などとアドバイスしがちである。読書感想文ならば、読んだ文章の内容にこだわってしまう。あらすじをだらだらと書いてしまう。いずれも、内容重視である。これらが、無駄なわけではない。

その場では、子どもは、分かったような気持ちになる。そして、ある程度は書くことができる。しかし、次に別の内容を書かなければならないときに、手も足も出ないということがある。そのたびに、振り出しに戻って、何を書けばいいのだろうとなってしまう。

このようなことを繰り返していても、子どもに書く力は育たない。では、どうすればいいのか。まったく逆の考えをしてみる。形式優先でいく。内容の反対語は形式である。文章で言えば、何を書くかの反対が、どう書くかである。どう書くか。すなわち、書き方のことである。それは、書くための方法、書くための技術、書くための型を意味する。

型があると安心できる。何のよりどころもないまま原稿用紙に向かうときの不安感を消し去ってくれる。型は、文章の全体像を与えてくれる。一つの文を書いても、次の文を考えなければならない。一段落を書き終えても、二段落めを何とかしなければならぬ。そのたびに、止まってしまう。このような手探りの状態から抜け出すことができる。あらかじめ、先が見通せる状態で、書き始めることができる。

型があっても、内容がなければ書けないのではという疑問が生じる。型を習得していくと分かるが、型があればこそ、今までは存在しなかった内容が、生み出されるようになる。型が内容を呼び込むのである。型こそが、子どもたちをその気にさせ、型こそが、子どもたちの書く力を育てる。型を制する者は文章を制する。